

幼兒教育

保育局外觀 其一

田代勝之助

我が校には初等部もあれば幼稚部もある、幼稚部の如きも設備の完からぬ點があつて保育上尠からぬ不便もあること、折々思ひ合はざるゝが、吾等の爲めには幼稚部がある爲めに學校に行くのが一層樂しみなのである、校門をくいると何れも水々しい子供等は満身の愛嬌をばばちや／＼した兩の頬に湛え、帽子の廂に手をかける眞似をしながら「先生お早う」と自分から氣着くもあればお附に注意されてするのもある、いつもの仲よしは我輩が靴の掃除をして居ると兩腕に吊り下がるもあれば帽子を取らうと企つるもあり、ポケットに手を差し込んで電車の乗り換へ切符でもありはせんかと探し廻るのもある、「先生僕がね」と話し掛けら

れては途中の人生觀も社會觀も一時に意識界を去て、大きな子供となり幸はつて仕舞ふ、オルガンの蔭に人目を忍んで彼等の温い頬に接吻すること度々ないでもない、もし人間の世話(今は暫らく教を避ふる)をすべく運命付けられて居るとせば幼児を取扱ふ程愉快な事はない、さりながらこれは吾々局外者の感であつて、いざ保育の任に當るとせば非常の困難もあり苦心もあるに相違ない、幼稚園と云ひ保育と稱する以上は教育的でなければならぬのである、お附が只風邪に罹らぬ様、泣かぬ様、怪我をせぬ様に「ぬ様扱ひ、消極的扱をする計りでなく絶えず積極的に仕向けねばならぬ、そして保育の効果茲にあり困難も亦其中に存するのである、さりながら余輩の所謂積極的とは心意の早熟を云ふのではない、いろはを讀み得たからとして少しも豪い所もなく學者となる萌芽とも限らない、遊戯が上手だから、手技が巧みだからとて褒めちぎるにも及ばず、徒らだからとて餘

り八ヶ間敷く攻め立つるにも及ばぬのである、只々自由の精神を宿し、獨立的活動を營む下地と習慣とを附與する様に努むべきである、彼の有名なルソーは兒童十二歳に達するまでの教育を消極的たらしむべしと云ふた、これは餘りに極端ではあるが、猥りに雑多の觀念を注入し不相應の作業に従はしむるは斷じて不可である、之を要するに、保母たるものは消極的に「ぬ」様扱をする中に高く遠き理想を持つて居らねばならぬ、お附の扱は其日送りで到着點が定かなるまじけれど、保母の扱方は必らず的確な標準があつて一言一行皆其に向つて進んで行くのでなくてはならぬ、今日の保育は稍もすると高等お附と小學教師との合の子の様な嫌がりはせぬだらうか?、以下局外觀の二三を述べて實際家の參考に資せんとするのである。

一、保母の組織、理屈上から云へば教育事業中保育者六ヶ敷ものはない、従てより多くの教育者ある人を要するのである、教育上の識見もなく心

理學の知識も相應に持たないで保育に當るほど危険はないではないか、誤た觀察の許に訓練を施すほど兒童に取りて不親切な話はない、けれども經濟上其他の關係から今日の處完全なる保母を求めむる事は至難の業である、又實際に當りては精密なる觀察と特別の訓練法に依らねばならぬ兒童は其數も甚だ少ない譯であるから主任となるべきものに相應の學識經驗ある者あれば事足ると思ふ、由來緻密の觀察眼を持つ女子中には自ら其任に堪ふる者も鮮なからぬだらうが、尙ほ靴を隔て、痒さを搔く感がある様である、世には園長として地位名望共に立派なるものもあるが實際を指導するには余りに高過ぐるをば如何せん、又保育事業は保母なる文字の示す通りに女と定められた様なものであるが一個の幼稚園には是非共男子の保母を置きたいのである、女子のみでは電車遊びの仲間にも應はしからぬ點があり、角力取りをする事も出来難いし

寄つてたかつて腕を引張り足を擡ち上げて騒き廻る相手にはならんのである、併かもこれ幼児が満身に充ち溢ちたる活動力を漏らすには窮竟の仕事ではあるまいか、而して訓誨を要するに當りても男子の一瞥は女子の數百言に勝る効果を奏する場合もありはしまいか。

二、談話、一般に幼稚園の課業中の一として談話がある様である、兒童の頭は余程詩的なものであるから談話は中々好きである、然るに無味乾燥のものに耳を傾けしむる事は如何にも可哀相である、で一般から見ると保姆の談話は余りに小學校の修身科的ではあるまいか、如何にも表情が少ない様である、どこか羞し相顔つきで口元を引き締めて居ては到底兒童の心情に突き入る事は出来ないものである、笑ふ時には大口を開いて笑ふべく、怒つた時は眼を圓くして見せ、悲しい話ならば眼に手を當て、擦つて見せる事が出来なくてはならぬ、斯くするのは男子で

三十二  
さへ中々思ひ切つて出来ぬもの故女子には殊に困難であるだらうが其處が教育の妙味である、他人が見て居るからと云ふ中は熱心の足りない證據である。

そして談話が上手になるには落語や講談を聞くのは余程利益がある、其上兒童文學の書類をも讀むべきである、斯くする中には自然と表情も口調も兒童的になる。

思ふに兒童のよく知つて居る材料を面白く聞かせる丈の伎倆を修練せねばならぬ、丁度芝居の様なものが高田、藤澤はホト、ギス、ハムレッツトと材料の新らしいものに依りて觀客を喜ばす芝翫、高麗藏は忠臣藏とか千代萩とかを幾度となく繰り返へしても技術其物を以て觀客を泣かせて居る、それ故に表情の伎倆から云へば舊派は新派に比して慥に一頭地を抜いて居ると謂ふべきである、趣味や理想の高いものには新派が受取らるゝとしても其低い者には舊派でなければ

ば感興を起さしむる事は出来ない、教育者の  
 談話も之と同様に心意の發達した高等の學生に  
 は教訓に學識さへあれば如何に訥辯でも興味を  
 起さしめ得るが幼兒には表情が巧みでなけれ  
 ば感興を催さしむる事は全く不可能である、兒  
 童既知の材料を巧みに取り扱ひ得るとせば新材  
 料の如きは誠に易々たるものである。  
 次に幼稚園の談話は「それですから皆さんは……

いろ／＼の汚點抜き法

△酒のしみ 酒の汚點は久しく経つ時は抜けるものなれば成る可く早く水にて洗ふ可し。尙抜けざる時は罏砂とアンモニヤ  
 の溶液にて洗ふ可し。又別法としては大豆の煮汁に半日位浴し置き更に清水にて洗ふ可し。但し酒のかゝれる時煙草の煙  
 をかけ置く時はしみとはならぬものなり。  
 △油のしみ 白砂糖を塗りつけて清水中に洗へ今大抵は落ちるものなり。  
 △醬油のしみ 布をよく張り置いて上より熱き湯を注ぎ可し。汚點は漸次に吸ひ取らる可し。  
 △乳のしみ 毛織物の上に鹽水、エーテル、又はベンゾール油を塗りつけ吸取紙にて拭ひ取る可し。若し絹物なる時は其部分  
 と淡きアルコール液中に浸して海綿にて洗ふ可し。  
 △血液のしみ 少し許りならば燈心に唾液を浸してよく拭く可し。若し血痕多ければ石鹼にて洗ふか或は冷水を口に含みて洗  
 ふ可く又酒のしみ抜き法に應用するも可なり。汚點濃きときは最初湯にて洗ひクエンサンと酒石酸とを同量に加へて汚點の部  
 分に塗りつけて洗ふ可し。其部分に酸を塗り洗ふ可し。汚點濃きときは最初湯にて洗ひクエンサンと酒石酸とを同量に加へて汚點の部  
 分に塗りつけて洗ふ可し。若し又白表に錆のつきたる時は桶に熱湯を入れ、其部分に鹼石を載せて湯に浸せば汚點は溶け去るが故に  
 △尿のしみ 淡きアルコールニ僅かの硝酸を加へたる五勺ばかりの液に一升位の水を加へたる割合の溶液にて洗ふ可し。  
 △ベンキのしみ 揮發油にて洗ふ可し。煙草の脂を除くには初め味噌汁にて洗ひ次に清水中に洗ふ可し。  
 △脂のしみ 揮發油にて洗ふ可し。

……なければなりません……」云ふ風に  
 最後に教訓的の抽象した言葉を扱ひのは好まし  
 からぬと思ふ、是非曲直の判斷は談話の模様  
 によりて兒童自らが出来る様仕向けねばなら  
 ぬ、又談話の材料は必ず教訓的でならぬと考  
 ふるのも僻見である、談話の目的には徳性涵養  
 の外に或る物があるべきである。

(以下次號)